
空からおちるもの

沙希

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

空からおちるもの

【Nコード】

N5137P

【作者名】

沙希

【あらすじ】

ある冬の日、シュハード王国王立騎士団副隊長のアリアドナは隊長の姿を探していた。執務をさぼりがちな隊長を探し出すのは彼女の役目だったのだ。そして隊長を見つけ出したアリアドナはひよんなことから知ることになる。―― 彼が冬を嫌っているこ

とを。（旧サイトからの転載作品です）

特別な訓練を受けた軍人らしい隙のない歩き方で、アリアドナは廊下を歩いていた。

歩いていた、と表現するのはふさわしくないかも知れない。だからと言って彼女は走っているわけでもないし、小走りをしているわけでもない。

気迫あふれる雰囲気を持ちながら、前へ突き進んでいる。突進、という言葉がきつと適切かもしれない。

アリアドナの部下たちが廊下で彼女とすれ違った際に頭を下げ、挨拶をしてくる。彼女もそれに軽く答えるが、部下たちの表情はアリアドナの異様な雰囲気恐れをなして一様に強張っている。

そう、アリアドナは怒っていた。

二十代のうちにシュハード王国王立騎士団隊長の地位にのぼりつめた、ルークスという男に対して。

驚異の出世で妬みと羨望を受けるルークス。伯爵家の嫡男という家柄だけでなく、騎士として武芸にも優れている。加えて隊長として事務を的確に処理する能力や、部下への気づかいを忘れないことから、年若い騎士たちからは絶大の人気を誇っている。そして彼の崇拜者は若い騎士だけではなくた。こぞって宮廷の貴婦人たちは彼に熱をあげているのだ。

誰もがルークスを優秀な人物であると崇めていたが、彼の直属の

部下たちはそれが嘘ではないとわかりつつも、それを気持ちよく肯定することは出来なかった。

なぜならルースには今の地位にいるのが不思議なほどに、職務からの逃避癖がある。ルース直属の部下たち（特にアリアドナ）を多いに悩ます心労の種だ。

「本性を知ってみなさい。あなたたちの王立騎士団隊長はいい加減でずぼらな人間ですよ」

そうアリアドナたちがルースを崇拜する人々に何度叫びたくなったことか。

だが彼女たちはそれを必死に押さえつけてきた。

彼をどれだけ批判しようと、上司であるルースの失脚は自分たちの失脚である。

だとすれば彼にはいつまでも人々の崇拜を集めてもらわなくては困る。ルースの人気に陰りができるような種があれば、それがどんな小さいものであっても消し去るのが部下である自分たちの仕事である。

だがこの行動が自分たちの首を絞めていた。

そう。今日もルースは執務室から突然、姿を消した。

年の瀬をむかえ、シュハード王国の王都周辺もだいぶ浮き足たっている。新年を迎えるための準備、という名の盛大な祭が催されている王都の人々の顔は明るい。だがこの時期は一番治安悪化が懸念され、毎年何人も騎士が外を走り回っている。現に今、アリアドナの部下たちの多くが城下の見回りに行っている。青の軍服を着た騎士が町を歩けば、それだけで十分に『俺たちが見張っているぞ』

バカなことはするなよ』と宣伝していることになるのだ。

とにかく、問題は些細なものから、王立騎士団隊長たるルークの判断が必要な大問題までそろいにそろっている。

ルークがいなくては、仕事が滞るばかり。

いくら逃避癖のひどい隊長でも、それぐらいはわかっていると思っ
ていたのに。

と、アリアドナは腹立たしく思っていた。

アリアドナは広大な王宮の敷地内にある王立騎士団棟の中庭へ通
じる扉を大きく開いた。

真冬の冷気が一気に襲いかかってくる。

ルークと長年仕事を共にしてきた彼女にはもう彼がどこにいる
のかわかりきっていた。ルークもそれを承知しているはずなのに、
一向に逃避場所を変える様子はない。変えたら変えたで困るのだが、
まるで自分に捕まるのを楽しんでいるような節があるので始末にお
えない。

今にも雪が降ってきそうな寒さの中、中庭のちょうど真中に立つ
大きな木の下にルークはいた。巨大な樹木に体をあずけるように
して、空を見上げている。なぜかとてもうらめしそうに。

「隊長……？」

先ほどまでルークに対して大きな怒りを抱いていたというのに、
アリアドナの声はどこか彼を案じる響きがあった。

いつも余裕の笑みを浮かべている彼だというのに、その表情はあ

まりにも頼りない。

「やあ、アリアドナ・シャール副隊長」

しかしアリアドナに向けられた表情は、いつも通りのものだった。口元の端を少し上げて、微笑んでいる。瞳も生気に満ち溢れている。アリアドナや部下たちを安心させる力強く、燃え盛る情熱の瞳。それはいつだってアリアドナたちを鼓舞してきた。

ああ、大丈夫だと思った。

彼はいつだって『強い人』だった。

「隊長、決裁がすんでいない書類が大量に残っています。早く執務室にお戻り下さい。それから將軍が追加で書類をまわしてきましたので、定時に上がれないのは覚悟して下さい」

ルースの顔が一瞬にして苦虫を噛み潰したようになる。それからわざとらしく溜息を吐いてみせた。

「追加の決裁書類だと？」

「はい。——將軍によりますとその追加書類、『このまへのツケだ』だそうです。何をやらかしたのですか？」

「……………」

「隊長、その沈黙は何かやましいことがあったのだと判断させていただきます」

「いや！やましいことなど何もないぞ！！」

「それでは――」

「上官命令だといえば、何も聞かないでくれるだろうか？」

アリアドナは目を丸くした。他の人間ならいざ知らず、ルークは上官である権限を使つての『命令』はほとんど自分たちにしたことがなかった。常に、自分たちに選ばせていた。

――どんな些細なことでもだ。

それが聞くなという。よほどやましいことなのかはわからないが、王立騎士団をまとめあげる隊長の『命令』は絶対服従が掟だ。破るわけにはいかない。

「はい」

「それはよかった」

ルークはほっとしたようすで笑顔を浮かべていた。

「それでは隊長、執務室にもど――」

「シャハール副隊長」

「？」

「雪だよ」

ルークにつられるようにして、アリアドナも空を見上げた。たしかに白いものがひらひらと空を舞っている。

「どうりで寒いはずだ」
「……………ええ」

陽気で明るいつつも隊長なら、この雪で喜んでよさそうなものだったが、なぜかあまり歓迎しているような声ではなかった。はらはらと空から降る水分の塊が忌々しいのか、それともただたんに寒いのが苦手なのか。ルースは空を睨んでいる。

アリアドナが怪訝そうな顔で自分を見ているものだから、ルースのほう不思議そうにアリアドナを見た。

「どうかしたか、シャハール」
「いいえ。隊長は雪がお嫌いなのか、どうなのか、気になったんです」

ルースは軽く笑った。

「わたしは昔から寒いのが苦手だね。……………いや、」
「？」
「寒いのが苦手なんじゃないな」

——冬が嫌いなんだ。

その後、アリアドナに引き立てられて大人しく執務室に戻ったルイスだったが、彼はすぐに仕事に取り組むことが出来なかった。執務室に王立騎士団の最高職に任じられているグラグ將軍が突如としてやってきたのである。はじめは騎士団の問題について真剣にルイスに話していた將軍だが、だんだんと話しがそれ、彼の孫娘の自慢へと変わっていく。

『どうだ、お前。うちの孫娘と結婚しないか？將軍家の娘だ。伯爵家のお前とじゅうぶんにつりあう』

好々爺の顔で言ってくる將軍にルイスは正直、辟易していた。これでは仕事が終わらせるところか、五歳児と結婚するはめになる。副隊長の顔が、美しくとも恐ろしい表情に変化してしまう。そう判断したルイスは、笑顔で將軍を執務室から追い出した。

「よろしかったのですか、隊長？」

「かまわん。どうせまた懲りずに五歳の孫娘の自慢をしに来る。

……それまでになんとしてでもこれを片づけなければならぬ！

！」

ルースはそう言い放つと同じに執務机の上に置かれている大量の――いや、尋常でない量の天井にまで届く紙束を指差した。

「今日ばかりは残業は勘弁だ。早く屋敷に帰って、暖炉であたたまりたい……！」

「……………」

「……シャハール、どうかしたか？」

熱くまくし立てるルースに相反し、アリアドナはどこか冷めた目で彼を見ている。

口ばかりでなかなか仕事をしないルースをアリアドナが非難しても、彼女に否があるとは言えないだろう。すべてルースがいけないのである。

「いえ、ただ、隊長のせいでわたくしまで夜勤になりそうだといいことを理解して下さっているのかと。なにせ將軍からの『ツケ』ですから、ほったらかしにするわけにもいきませんしね」

そうアリアドナは言うと、軽く微笑んだ。
そしてルースはその笑顔が怖かった。

普段、冷静沈着とうたわれるアリアドナ。少しでも彼女と仕事を共にすればわかることがある。アリアドナほど「冷静沈着」、という言葉が似合う女性はいない。そしてアリアドナにはもう一つ、似合うであろう言葉がある。誰もそれは口にしたりはしないが、ルースたちは心得ている。それは「目には目を。歯には歯を。」である。

まさか仮にも上官である自分にむかって抜刀してくることはないだろうが、それでもおもわずアリアドナの利き手の動向を確認してしまう。

自分の逃避癖にアリアドナが多大な迷惑を被っている、という自覚がルースには一応あった。だからといって、それを改める予定もないのだが。

「や、……あのだな、いいわけをさせてもらうとだな、これは断じてわたしのせいばかりではないぞ。この王国の治安をあずかる王立騎士団で働いているのだから、ある程度の忙しさは——」

「誰もそんないいわけをして欲しいとは言っていない。さつさと片づけてしましましょう。そうでないと、一睡もしないで明日の仕事に取り掛からなくてはならないことになります。——」ではとりあえずこの可決済みの書類を將軍のところへ提出してきます」

そう言ってアリアドナはいくつかの書類を抱え、足早にルースの執務室を出て行くとする。

アリアドナの冷たい笑顔から免れたルースは壮大に溜息を吐いた。

「隊長」

扉の前でアリアドナが振りかえたものだからまた心臓がドキリと跳ね上った。ルーイスは笑顔を保っていたが、自分でも気づかないうちに早鐘を打つ心臓部分を上から利き手で押さえていた。

「なんだい？」

「將軍のお孫さまとご結婚なさる前には、さつさと仕事を始めることを覚えてくださいね」

外は雪ではなく、いつのまにか細かい雨へと変っていた。

痛恨の台詞を言われたルーイスだったが、本来の有能さあつてか、天井にまで届いていた書類の山もだいぶ減っていた。

逃避癖のあるルーイスだが、驚異の出世は彼の有能さを如実に表

している。

時に部下たちに呆れられることもあるルークスだが、それでもアリアドナを筆頭とする彼らはルークスに付き従っている。ただの騎士団の上官と下官という規律から生まれてくる忠誠心ではなく、アリアドナたちはルークスの下で剣をふるう道を自らの意思で選んだ。ルークスが隊長でなければ、アリアドナたちは騎士団にいないだろう。もし彼が騎士団を去るというのなら、アリアドナたちは必ず行動を共にする。ついてくるなと言われようと、絶対についていくそれが彼らの関係だった。

ルークスの脳とペンを握る利き手は驚異的な早さで動いていたのだが、それがふと止まった。今まで流し読みをしていたのではないかと疑うぐらいの早さで書類をめくっていたのだが、その一枚の紙だけは丹念に下から上へ読んでいる。

しばらくしてルークスはその一枚の書類から目を離した。

ルークスの口元には笑みがあつた。けれどその目は怖ろしいまでに意思の輝きを放っていた。何かに挑む者の目。鋭く遠くを見ている目だった。普段はすつ呆けた言動と行動をとることも珍しくはないのに、時折ルークスはこのような表情を見せる。本心を明かさない男がふとした瞬間に本性を現す。貪欲にひたすら上を目指す顔。何かを成し遂げようとする者の顔だった。

「何が書いてあるんっすか、それ？」

ほとんど足音もなく執務室に入ってきた男にルークスは特別驚かなかった。瞳に宿る闘志を隠そうともしない。隠す必要がないと言えた。アリアドナ同様に彼もルークスの野望を知っている。かつ、

その野望達成へ共に走る部下。カルロスだ。

大きな紙袋を抱えるカルロスにルースは顔を渋くして言った。

「ノックぐらいはするものだぞ」

「まあ、いいじゃないですか。隊長にはノックなんて必要ないでしょう?」

そんな素振りは見せていないが、いつだってルースは気を張っている。周囲の気配の変化に、誰よりもルースは敏感だった。敵の多いルースには、そうあり続けることが生き残るために必要なのだ。

「常識の問題だ。それから上司の部屋に入る時はその口のタバコを捨ててから入れ、カルロス」

「はいはい」

カルロスは敬礼の仕草をしたが、その顔はニヤリと笑っている。

「その紙袋はなんだ?」

「ああ、巡回の土産っすよ。あとで見て下さい」

手渡された紙袋を不審そうに見たが、とりあえずルースは足元にそれを置いた。今はカルロスの報告を聞かなければならないからだ。

「町の巡回はどうだった？」

「酒によった男に言い寄られている妙齡の女性を助けたぐらいで、特に何事もなかつすよ。まあ、その女性を助けたついでにデートに誘ってみました、あえなくふられました」

ルースはそんなカルロスに苦笑をしながら、手に持つ書類をカルロスへ渡した。

「読んでみる」

カルロスは軽い気持ちでそれを受け取った。
そしてさつと書類に目をとおすと豪快に笑った。

「シャハール副隊長はこれをもう知っているんすか？」

「いや、まだ知らない」

「そうっすか」

カルロスは腕を組み、ルースの机のすぐ隣に置いてあるイスに座りこんだ。

「將軍職が目の前につてわけですね」

「カルロス、今ここにシャハールがいたらこう言うだろう。――」

——『口を慎みなさい。カルロス』」

ルークのそのアリアドナそっくりの物言いに、カルロスは爆笑するのを必死に堪えるはめになった。

「たしかに、隊長のすぐ上の椅子があいたようだが、わたしが將軍職につくにはまだ少しかかるだろう。今はまだ、上層部の敵が一人減ったことを喜ぶだけさ」

「隊長によやく昇進できたと思ったら、老年で退役って人も珍しくないっていうのに。つきることのない野望ですね」

「当たり前だ。わたしは一番の出世頭だからな」

さも当然だという顔でルークは微笑んだ。

「あつ」と、カルロスは思い出したように呟いた。

「どうしたんだ？」

「俺、巡回の報告以外に隊長に用件があつたんつすよ。——副隊長の代理で、処理し終わった書類を受け取りに来たんです」

「代理？」

「シャハール副隊長も、隊長のお守ばかりやってられないってことじゃないっすか」

カルロスの言葉にルークはむっとした。

「カルロス、飯にも上官に向ってその口の聞き方はなんなんだ」
「さあ、なんでしょうかね」

それからしばらく、ルースは書類を片づけることも忘れ、カルロスと大人気ない言い合いを続けた。

アリアドナは紅茶が入ったコップを片手に執務室へと歩いていった。ルースに眠気覚ましと根性づけに濃い紅茶を淹れたのだ。ふと何気なく、アリアドナは窓越しに見える空を見上げた。小雨が降り続けている。けれどまた夜になれば雪へと変わるかもしれない。

数時間ほど前のルースの言葉がなぜか脳裏に浮んだ。

——冬が嫌いなんだ。

なぜ冬が嫌いなのか、本当は聞きたかった。

でもどうしてか聞けなかった。『強い人』であるはずのルークのあまりにも弱々しい声音。
何も言えなかった。

どんよりとしてしまった自分の気持ちを捨てるように息を吐き、
アリア ドナは執務室の扉の前に立った。
扉を叩き、中へ呼びかける。

「シャハールです。失礼します」

「ああ、入りましたえ」

一礼して中へ入り、そのまま執務机の上に紅茶をそつと置いた。
書類に間違つてもこぼさないように、机の上に置かれているルークの手の邪魔にならないようにだ。

その些細な気配りをルークは好いていた。

「カルロスが書類を受け取りに来たかと思いますが」

「ああ、ついさっき出て行ったよ。――置き土産を残して」

ルークはそう言うと、足元から大きな紙袋を取り出した。

「この部屋に飾るようカルロスに言われたんだが、どう思つ？」

紙袋から出て来たのは派手派手しい装飾がついた天使の像だ。
アリアドナは少し驚いたように天使を見つめ、それから控え目な
笑みをみせた。

「この殺風景な部屋を色取るにはちょうどよろしいのでは？」
「しかし、こつも殺風景な仕事部屋に一つだけこんなものがある
のも変だろう」

「カルロスの好意です。二三日ぐらい、置くのも悪くないのでは
ないでしょうか」
「それもそうだな」

ではさつそく飾ろうと、ルースは楽しげな笑みを浮かべ、窓際
に天使の像を置いた。

「では隊長、残りの書類に取りかかって下さい」
「容赦がないな」
「当たり前です」

やれやれ仕方ない、とルースは大人しく執務机の上に積まれて
いる書類を攻略しにかかった。

アリアドナはその横で決裁済みの書類に不備がないかを点検して
いく。

さらさらとペンが紙の上をすべる音と、書類をめくれる音。そん
な音でさえ大きく聞こえてしまう。静けさだけがその場を占めてい
た。

それからしばらくたち、膨大な書類の山もほとんどが攻略されていた。けれどやはり、時計の針はとくに深夜を回っている。ルイスもアリアドナも、今日は自宅に帰ることはないだろう。自宅に帰る時間と明日また出勤する時間を考えれば、二人とも休憩所で休息をとるはずだ。

「シャハール」

「何です？もしかして全部終ったんですか？」

ほんのわずかだが、アリアドナの声には驚きが含まれていた。

「ああ」

頷くルイスに今度こそ、驚きが表情に出ていた。
そんなアリアドナを見て、ルイスは悪戯っ子のような表情を浮かべた。

「そんなにわたしの仕事の素早さに驚いたかね」

「……………ええ。まさか太陽が昇る前に終るとはまったく思っ
てはいませんでした」

「わたしが本気を出せば、このくらいは当然だ」

ほめてくれたまえ、と胸を張る勢いで言ったルイスだったが、

アリアドナの次の言葉には撃沈した。

「仕事に本気を出すのは、当然のことですよ。隊長」

「こつ、もう少し優しい言葉はないのかね。——この寒い冬の中、精を出したというのに」

「……冬はお嫌いですか？」

アリアドナは言い終わった瞬間、しまったと思った。

言うつもりはなかった。聞くつもりはなかった。

なのに、口からポロリと出てしまった。

ルークの表情が固くなる。

完璧な失言だった。

何てことだろう。自分はルークを支える側の人間でなければならぬというのに。

どうにかして取り繕うとしたそのとき、ルークが口を開いた。

いつものあの余裕のある声だった。自信に溢れた自分という価値を知る男の声だった。

「中庭のことを言っているのだろうが、————最近は何ほど冬が嫌いなわけじゃない」

ルークの目がアリアドナをしっかりと捕らえた。

見つめ返ししながら、アリアドナは思った。ルークは『弱音』を吐いていたというのに、それを受け止められなかった自分。ルーク

スは自分が困っているとわかって、すべてを呑み込んでしまったのだ。

自分の前でさえ、ルースは仮面を被ってしまったのだ。

鋭利な刃物がアリアドナの心を遠慮なく、切り裂いていく。痛かった。心が。

「なぜだと思う？」

アリアドナの心中を知ってか知らずか、ルースは微笑んでそう問いかけた。

「さあ、わかりません」

いつもの落ちついた声でそう返すしか、アリアドナには出来なかった。

ぐいっとルースがアリアドナの腕を掴み、自分の方へ引き寄せた。あまりにも突然で、アリアドナは抗うことなくルースの胸におさまった。

「隊長！離してください！」

はっとしたアリアドナが抵抗するが、ルースの腕はますます強くなるばかりだった。

ルースの顔がアリアドナの首筋にうつまる。

そしてルースは耳元で、アリアドナだけにしか聞こえない声で彼の心中を指し示す決定的な言葉を言った。

その言葉を聞いた途端、アリアドナが固まった。

ルースはアリアドナを離しながら言った。

「この書類は急いで送らなければならないものだろう。郵送の手続きを頼む。わたしはまだここで少し、別件の仕事を片づけることにするよ」

「……………はい」

アリアドナはぎこちなく動作でその場を立ち去った。

ルースはアリアドナの後ろ姿を見届けると、壁によりかかり、溜息を吐く。

相手の心を読めても、意思の疎通がはかれなければ、何の意味もない。ルースはその術を有効に使う方法を知っていた。けれど肝心の時は、どうしても上手く使いこなせないのか。

たった一人の女性の前に、自分は何も出来なくなる。なんて自分は単純なのだろうと思う。

「余裕がないな、わたしも」

自嘲気味に笑い、ルースは空を見上げた。

いつのまにか、雨は白い雪へとまた変っていた。
冬は嫌いだ。
けれど――。

王立騎士団副長に与えられる執務室に入り、アリアドナは崩れ落ちるように座りこんだ。

心臓は早鐘を打っていた。

耳元でルースがささやいた言葉がぐるぐると頭を回っている。

なんて、なんて、もったいない言葉をルースは自分に与えたのか。

けれどその言葉が意味するものは上を目指す彼には必要のないものだ。むしろ彼は率先して切り捨てなければならぬ。

切り捨てる手伝いを自分は今までしてきた。容赦なく。ルースには不必要なものだからと思って。何の躊躇いもなかった。

しかし自分が切り捨てられるとき自分はどうなるのだろう。

ルイスはどうなるのだろう。

そう考えるだけで、平静を保てなくなる。自惚れているわけではないけれど、きっとルイスだって余裕の顔を浮かべてはいられない。なくなる。

あの人が国王を玉座から追放するその瞬間まで、わたしは『わたし』でなければならぬというのに。

「いらぬ感情が多すぎるわ」

それは自分を誡める言葉だった。

□

□

ルイスのその声が脳裏にこだまする。
アリアドナは深くうな垂れた。

（後書き）

こんにちは。

『空から落ちるもの』を読んでもうござってありがとうございます。

このお話は短編小説として

完結していますが、

お話しを読んでもいただければおわかりの通り、
続きますっ！笑

その時はまた、

読んでくださると嬉しいです！

ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5137p/>

空からおちるもの

2011年6月9日20時06分発行